

金東里『巫女図』と芥川龍之介『おぎん』 における習俗とキリスト教との葛藤

——日韓の信仰観・家族観比較を視点として——

洪 明 嬉

一、はじめに

日韓両国において、キリスト教は伝来初期に迫害を受けた。金東里『巫女図』（中央、一九三六年五月）⁽¹⁾は、巫女である母モファとクリスチャンとなった息子ウギの關係を通して、シャーマニズムとキリスト教の葛藤を描いた作品である。芥川龍之介『おぎん』（中央公論、一九三二年九月）は、おぎんが処刑直前に両親を想って棄教する姿を通して、殉教の際の葛藤を描いた作品である。

本稿では、両作品に見られる、キリスト教と習俗との葛藤のありようを比較検討することを目的としている⁽²⁾。その際、具体的な比較の視点として、異教としてのキリスト教（者）が土着の宗教観・信仰観からどのように眼差されたか、また迫害されるキリスト教信者の内側における家族観とはどのようなものだったかに焦点をあてていくこととする。以上の日韓の文学における異教としてのキリスト教（者）の外側と内側の比較を通して、両国における伝来初

期のキリスト教と習俗との葛藤のありようを明らかにしていくことを目指したい。

二、当時の両社会における宗教観・信仰観

この章では、金東里『巫女図』と芥川龍之介『おぎん』において、キリスト教（者）がどのように見られたか、という社会側の宗教観・信仰観の視点において考察してみたい。

(1) 『巫女図』

モファが市場から帰ってはじめてウギをみた時、その青白い顔にいわれのない恐怖の色をうかべ、いまにもその場から逃げだすかのように、瞬間、肩をよじらせてあとずさりしたが、突然、瘦身のウギを、いつぱいにひろげた両腕で、親鳥がひなを抱くかのようにとびついて抱きしめた。

「だれかと思ったら、アイゴ……ウギーおまえじゃないか」

モファは声をかぎりに泣きだした。

『巫女図』は、韓国の近代における慶州を背景としている。巫女である母モファは、一〇年ぶりに戻った息子ウギに対して、「いつぱいにひろげた両腕で、親鳥がひなを抱くかのようにとびついて抱きしめ」「声をかぎりに泣きだし」ている。ここからは母の情で久々にあった息子を温かく迎え入れるモファの姿が表れているが、次の場面で、ウギがクリスチャンとなったことを知るや否や「雑鬼にとりつかれた」といって激しく抵抗する。

モファの両眼は宝石のようにきらきらと輝き、発作でもおきたように腰を何度も折り曲げながら、両手をこすりあわせた。呪文が終わるや否や彼女は「祈禱台」の器の水を口にふくみ、ウギの頭から全身にプツと吹きかけた。

オッセ、鬼神よ退散すべし。／ここはヨンジュ　ピル峰の頂に／切り立ち並ぶ屏風岩　五十尋もの深き淵。／汝の来るべき所にあらず／右手に刃　左手に火を持てり／　オッセ　雑鬼神　とく失せよ

ウギははじめにくらって、モファが呪文を唱えるさまをみつめていたが、やがてうなだれてしばらく祈りをささげてから、立ちあがって黙って部屋をでていった。

モファは、クリスチャンになったウギに対して、巫女としての行為でもって、「鬼神」「雑鬼神」と言いながら追い払おうとしたのである。のちにモファのクツの傍ら、ウギの懷に入れておいた聖書がいつの間にか燃やされ、ウギはそれを制しようとしたが、モファの包丁に刺され、その後遺症で死ぬ。モファは、ウギの死に対して「うちの息子はイエス鬼神がさらっていった」と言う。このように、モファは、イエスやキリスト教（者）のことを、「雑鬼にとりつかれた」、「鬼神」「雑鬼神」「イエス鬼神」と言っている。

ところで、

彼女の目には、ときどきすべてのものが鬼神とうつるのであった。それは人間だけでなく、ブタ・ネコ・カエル・ミミズ・魚・チョウ・柿の木・アンズの木・火かき棒・壺・石段・わらじ・ナツメの木のとげ・ツバメ・雲・風・火・飯・風・パガジ・かご・炭・さじ・灯明……これらすべてのものが、彼女とたがい顔をつきあわせ、叫び、語り、憎み、そねみ、腹をたてあう隣人のように思えた。だから、これらすべてに「様」をつけて呼んだ。

とあるように、シャーマニズムの宗教観として母モファはあらゆるものに神を見出すにもかかわらず、なぜキリスト教は認めずに「雑鬼」として排斥したのか。彼女は、キリスト教の何であるかを理解しようとしてもしていない。よって、キリスト教の教義をもって拒絶しているのではない。そこにはまず、母である自分とわが息子の宗教が異なることへの、理屈を超えた危機感があると言えるだろう。しかし、それとは別に、以下のようなことも理由として考えられる。すなわち、キリスト教が村にもたらされる以前のモファは、「慶州一帯を中心にして数百・数千回の祈祷をし、数千・数万人の病気を治してき」ており、彼女の「降神と祈祷」は「自身がそう考えたばかりでなく、祈祷を頼みにくる人、客鬼にとりつかれた人のほう」からも「医者や薬より、はるかにききめが早く、確実に、てっとり早いと考え」られるほど、巫女としての能力が認められていた。そしてついにはシャーマニズムの代行者として、息子であるにもかかわらず、クリスチャンとなったウギを死なせるまでにいたった。巫女としての自分に対する自信・確信には、一貫して揺るぎがない。ところが、キリスト教の布教により周りの評価には変化が生じる。

しかし「イエス鬼神」たちは、出ていくどころか、ますます広がっていった。そのうえ、昔モファに祈祷や降神を頼みにきた人まで、ひとりふたりと、みなイエス鬼神にとりつかれていった。

そのうちに、ソウルからまた著名な牧師がやってきた。かれは祈りをささげて病気を治す力があるとかで、村じゅうの人たちが集まりはじめた。（中略）説教台の上へのせられる女たちの金銀の指輪の数が、日に日にふえていった。寄付金があふれた。こうなると、モファの祈祷などとはくらべものにならないとささやかれた。

ここからは、キリスト教が、その「病気を治す」力によって人々に受け入れられるようになっていく様子が描かれている。そして、これまで病を治してきた「モファの祈祷などとはくらべものにならないとささやかれた」のであ

る⁽³⁾。すなわち、実質的な効力への評価が、モファからキリスト教へと移っていったのである。このような状況も合わさることで、モファは、シャーマニズムの、あるいはその巫女としての宗教的権能を脅かすものとして、直感的にキリスト教を忌避したのである。一〇年ぶりに会ったウギを見たモファが、クリスチャンであると知る前に「その青白い顔にいわれのない恐怖の色をうかべ、いまにもその場から逃げだすかのように、瞬間、肩をよじらせてあとずさりした」とあるのは、そうした直感による察知があったと読むことができるだろう。

(2) 『おぎん』

次に『おぎん』においてはキリスト教(者)がどのように見られたかを確認したい。

元和か、寛永か、とにかく遠い昔である。

天主のおん教を奉ずるものは、その頃でももう見つかり次第、火炙りや磔に遇はされてあた。しかし迫害が烈しいだけに、「万事にかなない給うおん主」も、その頃は一層この国の宗徒に、あらたかな御加護を加へられたらしい。

『おぎん』の時代背景は「元和(一六一五―一四)か、寛永(一六二四―四四)か、とにかく遠い昔」と設定されている。一五八七年の豊臣秀吉の禁教令以降、キリスト教は弾圧されたが、特に一六一四年からは全国的に大迫害と追放が行われた。上の箇所にも、「天主のおん教を奉ずるものは、その頃でももう見つかり次第、火炙りや磔に遇はされてゐた」とあるので、作中の時間は、一六一九年一〇月の京都の大殉教(52人)、十一月の長崎の大殉教、一六二二年の元和の大殉教、一六二三年の江戸の大殉教(50人)と迫害による殉教が続いていたころであろう。物語の舞台が「浦上」であることからすると、一六一九年十一月の長崎の大殉教の前後とも考えられる。こういった迫害のさなか

で、作中のキリスト教とキリシタンは社会からどのように見られたのか。

おぎんとその養父母の三人は、激しい拷問を受けるが、「全然悪びれる気色はな」く、「代官の屋敷へ引き立てて行」く途中も、「暗夜の風に吹かれながら、御降誕の祈禱を誦しつづけた」のみではなく、「水責や火責に遇つても、彼等の決心は動かなかつた」。こうしたキリシタンの姿について、代官は次のように考えている。

代官は天主のおん教は勿論、釈迦の教も知らなかつたから、なぜ彼等が剛情を張るのかさっぱり理解が出来なかつた。時には三人が三人とも、氣違ひではないかと思ふ事もあつた。しかし氣違ひでもない事がわかると、今度は大蛇とか一角獣とか、とにかく人倫には縁のない動物のやうな気がし出した。さう云ふ動物を生かして置いては、今日の法律に違ふばかりか、一国の安危にも関る訣である。そこで代官は一月ばかり、土の牢に彼等を入れて置いた後、とうとう三人とも焼き殺す事にした。（実を云へばこの代官も、世間一般の人々のやうに、一国の安危に関るかどうか、そんな事はほとんど考へなかつた。これは第一に法律があり、第二に人民の道德があり、わざわざ考へて見ないでも、格別不自由はしなかつたからである。）

ここで注意すべき点は、代官がキリシタンを人間ではない「大蛇とか一角獣とか、とにかく人倫には縁のない動物」、すなわち不可思議な妖異と考えていたということである。代官は、「実を云へば」「世間一般の人々のやうに、一国の安危に関るかどうか、そんな事はほとんど考へなかつた」という。「わざわざ考へて見ないでも、格別不自由はしなかつた」とは、一介の代官にすぎない彼にとつては、キリシタンについて法が定めるところとその危険性について、リアリティーを感じてはいなかつたということである。そしてそれは世間一般の人々も同じであつたというのである。つまり、代官をはじめとする世間の人々は、あくまでも妖異としてのリアリティーにおいてのみ、キリシタンを捉えていたと言えるだろう。

作者芥川龍之介は、こうした当時の人々のキリシタンに対する見方を、他の作品の中でも鮮明に描いている。一例として、『尾形了齋覚え書』（『新潮』一九一七年一月）が挙げられる。

『尾形了齋覚え書』は医師尾形了齋が申年三月二十六日（一六〇八年三月二六日）に藩に書いた報告書の体裁をとっている。農民与作の未亡人である篠が重病にかかった娘里の往診を頼みにきたが、尾形は篠が「切支丹宗門」であることを理由に断る。翌日、再度頼みに来た篠に棄教するならば診察すると答えたところ、篠は懷から十字架を取り出し、三回踏むことで棄教した。しかし手遅れで娘は死んでしまい、篠は娘と共にデウス（天主）を失ったといつて発狂する。しかしその翌日尾形は、伴天連らが篠の懺悔を聞き届けた後、祈祷により里が蘇生する場面を目撃する。

古来一旦落命致し候上、蘇生仕り候類、元より少からずとは申し候へども、多くは、酒毒に中り、乃至は瘴氣に触れ候者のみに有之、里の如く、傷寒の病にて死去致し候者の、還魂仕り候例は、未嘗承り及ばざる所に御座候へば、切支丹宗門の邪法たる儀此一事にても分明致す可く、別して伴天連当村へ参り候節、春雷頻に震ひ候も、天の彼を憎ませ給ふ所かと推察仕り候。

この箇所において尾形は、「バテレン追放令」の、「日本ハ神國たる処きりしたん國より邪法を授候儀 太以不可然候事」とあるのに照らして、医者としての見識を元に、死んだ者を蘇生させるといふ術の不可思議であることを指して明らかに邪と見なせると言っている。つまり尾形は、あるはずのない死者の蘇生を目の当たりにすること、『おぎん』の代官と同様、実感をもつてキリスト教の不思議さ、妖しさを捉えていると言えるだろう。

五野井隆史は日本のキリシタン迫害の歴史について、「宣教師達はすでに一五五一年の時点で山口において、彼等が「人間の肉を食べた」といって誹謗された」と指摘した。そしてその背景には、「一六世紀以降の社会で優越して

いた三世の仏教的価値観が、キリスト教の倫理観によって否定されたこと」により、「社会的に序列化されていた社会秩序が根底から突き崩される危険性があつた」からだという⁽⁴⁾。『おぎん』の代官や『尾形丁斎覚え書』の尾形が、仏教的価値観においてキリシタンを否定したとは言えず、社会的秩序の混乱を危惧する意識を明確に持っているわけでもない。尾形は、先の箇所で「伴天連当村へ参り候節、春雷頻に震ひ候も、天の彼を憎ませ給ふ所かと推察仕り候。」と、あくまでも「天」が妖異なる存在を憎むはずだという発想で語っているのである。すなわち、これらの作品は、為政者の政治的視線とは別に、当時の一般的視線はキリスト教(者)をあくまでも妖異として捉えていたことを浮き彫りにしていると言えるだろう。

三、迫害される信者の家族観

この章においては、迫害される信者の家族観について検討したい。迫害される信者の家族観における両作品の共通点は、主人公の家族が相反する土着の宗教・信仰を持つ点である。ウギは「自分が神に熱心に祈りをささげることによって、母と妹の病いをなおさねば」と、家族の宗教に同調することなく、キリスト教の神に祈ることで彼らを救おうとした。一方おぎんは、仏教徒の実父母が地獄に落ちているのに自分だけ「はらいそ」へ行くことはできないという理由で棄教する⁽⁵⁾。すなわち、主人公の家族への態度に相違点があるわけだが、当然ながらこれは単に信仰の強度に起因するものではない。それぞれが持つ伝統的な家族観と信仰心が複合的に作用した結果だと思われる。よって、それらがいかに二人の内面を形作っているか、具体的に確認していくこととしたい。このことを通して、迫害されるキリスト教(者)が、内側からどう捉えていたのが明らかにすると見通している。

(1) 『巫女図』

『巫女図』においてウギは聖書を燃やした母モファを止めようとして、彼女の包丁に刺され、その後遺症で死ぬ。ウギは、九歳の時にお寺に送られ、一〇年間、連絡をとっていなかったが、一九歳となつてかえつてきた際、「わたしの母は巫女の悪霊にとりつかれており、妹はおしでつんぼの悪霊にとりつかれております」と言い、「自分の力によつて、自分が神に熱心に祈りをささげることによつて、母と妹の病いをなおさねば、と心のなかで決心した」。ウギは母と妹の宗教に従うのではなく、それを病だと考え、キリスト教を通して彼らを救おうとした。

また

ウギの病いは、その年の秋が過ぎ冬にはいつてから、めだつて悪くなつていった。モファがときどき、心をかきむしるようなふるえ声で、手をとつて、

「ねえおまえ、これはいったいどうしたことなんだろう。遠い道をはるばるたずねてきてくれたのに。おまえがこんなになるなんてー」と涙を流すと、

「かあさん、心配しなくてだいじょうぶ。死んだらとうさんの所に行けるもの」

ウギは静かにこう言うのだった。何かほしい物はないかと聞かれると、彼はだまつて首をふつた。だが、母が外出してナギひとりである時は、ときどきナギの手をとり、

「聖書が一冊あつたらなあ」

と言ふのだった。

とあるように、病いがひどくなり生きる希望がなくなつた際、「死んだらとうさんの所」すなわち神のいる天国に行けると言つており、ただ聖書のみをほしがつていた。さらにヒョン牧師のくれた聖書を手にしたウギは「それを胸に

いだいて目を閉じた。閉じられた目には涙がにじんだ。」とあるように、死に間際においても聖書を抱き、安心し、静かな感動を覚えているのである。以上のことからウギはキリスト教思想によって、近代的自我が確立され、母への親子の情愛を確かに残しながらも、母から離れて個人の宗教を持つ、自立した人間となることがわかる。

(2) 『おぎん』

おぎんは、「水責や火責に遇つても、彼等の決心は動かなかつた」にもかかわらず、焼かれる直前に以下のように言う。

すると突然一同の耳は、はつきりと意外な言葉を捉へた。

「わたしはおん教を捨てゝる事に致しました。」

声の主はおぎんである。見物は一度に騒ぎ立つた。が、一度どよめいた後、たちまちまた静かになつてしまつた。それは孫七が悲しさうに、おぎんの方を振り向きながら、力のない声を出したからである。

「おぎん！ お前は悪魔にたぶらかされたのか？ もう一辛抱しなへすれば、おん主の御顔も拝めるのだぞ。」

その言葉が終らない内に、おすみも遙かにおぎんの方へ、一生懸命な声をかけた。

「おぎん！ おぎん！ お前には悪魔がついたのだよ。祈つておくれ。祈つておくれ。」

しかしおぎんは返事をしない。ただ眼は大勢の見物の向うの、天蓋のやうに枝を張つた、墓原の松を眺めてゐる。その内にもう役人の一人は、おぎんの縄目を赦すやうに命じた。

おぎんは、火をつけられようとしたとき、はつきりとした言葉とともに棄教してしまう。孫七の「悲しさう」な「声」やおすみの「一生懸命な声」の説得に左右されず、「ただ眼は大勢の見物の向うの、天蓋のやうに枝を張つた、

墓原の松を眺め」揺るぎのない決意を示していた。すなわち、「あの墓原の松のかげに、眠つていらつしやる御両親は、天主のおん教も御存知なし、きつと今頃はいんへるのに、お堕ちになつていらつしやいませう。それを今わたし一人、はらいその門にはいつたのでは、どうしても申し訣がありません。」というのである。

ここで注意すべきは、おぎんが墓原を眺めつつ両親を思い起しているという構図である。筒井早苗は、日本の中世のキリシタンは「家族や親しい者たちへの執着を避けるため、彼らを遠ざけて死を迎え」たのであり、それは当時の「仏教の臨終行儀」であり、また「ヨーロッパの死のマニユアル書である『往生術』」の思想でもあったと指摘した⁽⁶⁾。死んで天国に行くとしても、現世の家族と世俗への執着を避けることは容易ではなかったのだ。

五野井隆史は、当時の社会通念として「三世の契り」、すなわち「親子」「夫婦」「主君とか師弟」との結びつきが強く存在したことを指摘した⁽⁷⁾。『おぎん』においては、おぎんと実父母との間の「親子」の契りだけでなく、おぎんの棄教を聞き、「はらいそ」へ行くのは夫の「お供」をするためだと告げて棄教するおすみにも「夫婦」の契りが強く関わってきている。当時の日本社会における肉親の結びつき・夫婦の結びつきは重要な問題であったのだ。

キリシタン史によれば、フランシスコ・ザビエルが初めて日本に布教し、多くの改宗者を出したとき、彼らは涙を流しながら、洗礼を受けずして死去した先祖のみたまの行方についてたずねたということである。ザビエルは「聖フランシスコ・ザビエルの書翰抄、書翰第三〇」において、日本人が「教について何も識らない先祖が、地獄へ落ちることを許した」神は「全善ではな」く、「無慈悲」である言い、「亡くなった両親をはじめ、妻子や先祖への愛の故に」「非常に悲し」んだと書き記している⁽⁸⁾。

一方、先行研究においておぎんの棄教は、「エゴイズム」についての自問自答であり、「主体性」をもって信仰を捉え直したのだと指摘されている⁽⁹⁾。はたしてそう言えるだろうか。すなわちこれらは、おぎんの棄教が、自ら選ん

だものである点、また父母への愛情という切実な葛藤を起点としている点を重視する見方である。しかし、このような棄教には、むしろ自我の未発達が関わっていると考えることができるのではないか。狭間芳樹「キリシタン信仰におけるマリチリヨと「個」についての一考察」には、次のような指摘がある。

つまり、近代的な「個人」という概念が確立以前の「個」とは、共同体のなかで自覚される「個」であり、個別的に信仰に向う「個」であった。ならば、その意味で、マルチリヨに向うキリシタン各人は「個」を自覚していたことにならないであろうか。キリシタンのマルチリヨについて考える場合、キリスト教の教義が、政治的判断上そぐわなかったとか、神道や仏教といった日本の伝統思想の反発を招いたために信徒が死へと「追いやられた」との見方が一般的であるが、そうではなくキリシタたちが、むしろ積極的な判断として死を選択したと考えうるならば、ヨーロッパでの民衆宗教運動が日本においてはマルチリヨというかたちで顕現したと捉えられるであろう。¹⁰⁾

狭間芳樹は、当時のキリシタンがマリチリヨの際、単に殉教の意味を知っていたのみではなく、「個」・自我の発芽があったと言えるのではないかと述べている。そうとするならば、地獄に行っている実父母を思い棄教するおぎん、そして夫の「お供」をするために殉教しようとしたのだと言い棄教するおすみは、従来の家族観、「三世の契り」とらわれ、未だ「個」が萌芽していないと見ることができないのではないか。

そもそもキリスト教信仰を持つということとは、神の前で一人の人間としての自己のありようを問うこと、すなわち近代的自我の概念を獲得するということである。時代背景を近代とする『巫女図』は、キリスト教信仰を通してウギが近代的自我を獲得し、母に殺されるという殉教を成し遂げている。一方『おぎん』は江戸時代という時代背景の中で、当時の社会通念である「三世の契り」や家族観によって棄教してしまったのである。

四、おわりに

この章ではまず、二章・三章で確認したことについて、あらためてまとめておきたい。

キリスト教という異教と習俗との葛藤について、世間の側からの眼差しという点では、次のような二作品の相違が確認できた。『巫女図』においては、異教としてのキリスト教は、病気を癒すといった実質的な効力によって社会の側から認められるとともに、シャーマニズムの主体たるモファからは同じ意味において信仰者の直感に基づいて排斥すべきものとなった。一方『おぎん』では、不可思議な術を使う妖異として、あくまでもその不可思議さ妖しさゆえに邪なるものと見なされたのである。

信仰者の内側からの視点においては、両作品に描かれたものについて次のように考察できる。そもそもキリスト教信仰を持つということは、神の前で一人の人間としての自己のありようを問うこと、すなわち近代的自我の概念を獲得するということである。時代背景を近代とする『巫女図』は、キリスト教信仰を通してウギが近代的自我を獲得し、母に殺されるという殉教を成し遂げている。一方『おぎん』は江戸時代という時代背景の中で、当時の社会通念である「三世の契り」や家族観によって棄教してしまったのである。

最後に両作品が、最終的に異教としてのキリスト教と習俗との葛藤をどのように収束させているのかについて、述べたい。

『巫女図』のウギは母の包丁に刺され死に、モファは最終的にクツをしている間、死んでしまう。ウギは殉教を遂げたのである。

『おぎん』においては、おぎんは地獄に落ちた実父母のために棄教し、おすみは夫の「お供」をするために棄教す

る。信仰よりも人間同士の結びつきを選択した棄教者について、作中の作者（語り手）は末尾で次のように語っている。

さらにまた伝うる所によれば、悪魔はその時大歡喜のあまり、大きい書物に化けながら、夜中刑場に飛んでゐたと云ふ。これもさう無性に喜ぶほど、悪魔の成功だつたかどうか、作者は甚だ懷疑的である。

墮落の結果として三人が棄教したにもかかわらず、「これもさう無性に喜ぶほど、悪魔の成功だつたかどうか、作者は甚だ懷疑的」という語り手の設定に注意すべきであろう。つまり作品において棄教は、必ずしも否定されていない。キリスト教信仰と習俗との間での葛藤の切実さを描き、人間的情愛を美しいものとする地点において作品は収束しているのである。

注(1) 金東里の短編小説『巫女図』は一九三六年五月『中央』に発表されて以来、四七年、六三年、七八年と三回の改作が行われており、また一九七八年に長編『乙火』において長編化された。ここからは金東里の作品への並々ならぬ愛着が窺われる。

(2) 金東里『巫女図』と芥川龍之介の文学を取り上げて論じた論考としては以下の二つが挙げられる。阿武正英氏は「芥川龍之介『神々の微笑』と金東里『巫女図』（『日本文化研究』九、二〇〇三年）において、前者は「土着の側はキリスト教勢力に対して樂觀的ともいえる反応を示している」一方、後者は「土着の側は衰亡を予感させるような一面と同時に、土着の根強さを絶妙に形象している」と指摘した。また曹紗玉氏は「金東里『巫女図』と芥川龍之介の文学―伝統宗教とキリスト教の葛藤と習合―」（『日本研究』四三、韓国外国語大学校日本研究所、二〇一〇年三月）において、「巫女図」と「神々の微笑」との比較では、日韓の「伝統的な信仰が新しい宗教のキリスト教と葛藤する様相」を、更に「地獄変」との比較では、「巫女図」が「新しい神」の誕生や「新しい人間像」の創造を目指したのに対して、「地獄変」では人生の凡

(3) てを犠牲にして描いた屏風の意味を述べることで、金東里文学への芥川の影響を指摘した。

金仁会氏（『韓国巫俗の総合的考察』、高麗大学校民俗文化研究所、一九八七年、一一四頁）は巫俗とキリスト教の相互関係が病人の治療意識を通してさらに密接になり、シャーマニズム的要素がキリスト教会の名の下で花を咲かせていると指摘し、曹紗玉氏（前掲論文、一八一頁）は、ここから「巫俗信仰とキリスト教信仰の習合」を指摘している。更に、柳東植氏（『韓国の宗教とキリスト教』韓国基督教書会、一九六六年、一三一頁）は一九一九年三月一日の独立運動以来、日帝の弾圧で挫折した民衆と教会が一九三〇年代に「巫俗的母性的信仰」の形に急転し、「内向的神秘主義」に向かわせたと指摘した。

(4) 五野井隆史「日本におけるキリシタン迫害の歴史性」『教会史研究』一八、韓国教会史研究所、二〇〇二年六月、三四—三五、四三頁。

(5) 先行研究では、おぎんの両親を理由とした棄教に対して、日本の美意識の視点から指摘が多く提出されている。例えば、片岡良一（『芥川龍之介』福村書店、一九五二年七月）は、『おぎん』は「個人主義とか新しい信仰（思想）とかいうものより、結局血のつながりや家族関係の方が強いものだということ」を告げた作品だとし、河村清一郎（『神々の微笑』「おぎん」「おしの」など）『金城国文』、一九六〇年二月）は「義理人情に規制された親子の愛情」を指摘する。また三好行雄（『南京の基督』に潜むもの）『国語と国文学』、一九七一年一月、一三三頁）は、「奉教人の死」とは違って「地上的な肉親の恩愛に執しつづけた」「おぎんを棄教にさそう刑場のかなたの（墓原）は（日本）の象徴であろうし、日本の美意識の独自性を説く「神々の微笑」との交響も否定できない。」とした。宮坂覚氏は「東洋のエトスの支配」（『南京の基督』論）『文芸と思想』福岡女子大、一九七六月二月）、『東京のエトスに絡め捕られた』（『シンポジウム』キリスト教と近代文学 近代文学における切支丹文学という領域とその臨界—芥川龍之介「神神の微笑」と遠藤周作「神々と神」とを視点に）『文学・語学』二〇二、二〇一二年三月）と指摘した。福井靖子氏（『芥川龍之介「おぎん」をめぐる』『白百合女子大学研究紀要』一六、一九八〇年二月、四七頁）は「主題を（『日本の心情』と『キリスト教信仰』との相剋にある』）としてみて（『日本の心情』とは、具体的にいえば、〈孝道〉もしくは〈肉親への愛情〉）としたという指摘がある。

また、単なる棄教物語ではなく、キリスト教的視点から高い評価もなされている。例えば佐藤泰正氏（『奉教人の死』

と『おぎん』―芥川切支丹物に関する一考察―『国文学研究』五、梅光女学院大学、一九六九年十一月、一一一頁）は「あの『墓原の松のかげ』に眠り、「いんへるの」に落ちたと信ぜられる両親を捨ててゆくことは出来ぬというおぎんの告白は、この避けがたく重い問いを我々に突きつける。」とし、遠藤周作の『沈黙』へと繋がる「名もなき者の復権」がテーマであったと指摘した。更に、河泰厚氏（『芥川龍之介の基督教思想』翰林書房、一九九八年、一〇〇頁）は、「肉親のための棄教こそが人間にとっては本情」「肉親への愛と信仰のはざまに苦しむ『篠』と『おぎん』とはほかならぬ芥川自身であり、また我々自身である」と指摘した。なお、関口安義氏（『この人を見よ 芥川龍之介と聖書』小沢書店、一九九五年、一四四、一四五頁）の「日本人的に肉親の情が、切支丹信仰の妨げとなった」が結局は「東と西の問題」に拡大されていく「キリスト教やヨーロッパの思想にふれても、結局は日本のものに戻る、あるいはその間にあって悩むという姿」だと指摘し、細川正義氏（『おぎん』関口安義・庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版、二〇〇〇年六月、八一頁）も同様に「東と西」のはざまにあって煩悶する芥川の心情」を指摘した。

- (6) 筒井早苗「キリシタンにおける死の作法―家族による看取りの問題を中心に」『金城学院大学キリスト教文化研究所紀要』一三、金城学院大学、二〇一〇年、八八頁。

- (7) 五野井隆史「基調講演「キリシタン史からみた小西行長」」、宇土市教育委員会編『再検証・小西行長 謎の武将が今よみがえる』熊本県宇土市、二〇一〇年、一八、一九頁。

- (8) 福井靖子「芥川龍之介『おぎん』をめぐる」『白百合女子大学研究紀要』一六、一九八〇年十二月、五一頁）からの再引用。

- (9) 福井靖子氏（『芥川龍之介『おぎん』をめぐる』『白百合女子大学研究紀要』一六、一九八〇年十二月、五九頁）は「これは（おぎん）が稚ない、或は盲目の信仰から抜け出て、主体性のあるおとなとして自己の信仰を見つめ直していることの宣言ではないのであろうか。」と指摘し、また駒尺喜美氏は「殉教という純粹にみえる行為も、その底にはやはり己れひとり天国へ行けばよいというエゴイズムがひそんでいるのではないか、という自問自答」と指摘している。

- (10) 狭間芳樹「キリシタン信仰におけるマリチリヨと「個」についての一考察」、『アジア・キリスト教・多元性』六、現代キリスト教思想研究会、二〇〇八年三月。

* 金東里の『巫女図』の引用はすべて『朝鮮短編小説選（下）』（大村益夫・長璋吉・三枝壽勝編、岩波書店、一九八四年）、また芥川龍之介の作品の引用はすべて『芥川龍之介全集』第一―二四卷（岩波書店、一九九五―一九八年）に拠る。なお旧漢字は適宜新字体に改め、ルビは省略した。

* 本稿は日中韓国際シンポジウム「東アジア文化交流―妖怪・怪異・変異―」（早稲田大学、二〇一五年二月二〇日）での口頭発表に再考を加えたものである。

（ほん みよんひ・韓国海洋大学非常勤講師）